

# 美術月評

2月

上村豊

## 文化

2月初め、県立美術館では、昨年末から始まった2つの開館10周年記念企画展「彷徨の海」旅する画家・南風原朝光と台湾、沖縄、「邂逅の海」交差するリアリズム」が、共に会期を終えた。県民全体を巻き込む議論により作られた全国でもユニークな基本構想（1995年）から生ま



松尾海彦個展〈展示風景〉



妻谷薫の〈風の隅から〉

### 検証 批判的観点欠く 地域から「表現の場」 県立美術館 10周年展

松尾海彦展

繩の社会・文化全般に関わる大変重要な機会であったと言え

しかしながら、両展ともこのような注目や期待に込めるものであったのか、大

品をひとくりに語る乱暴

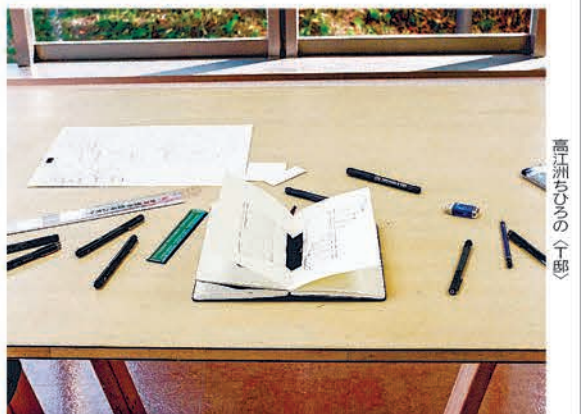
写真展「FAX NIPPON」

松尾海彦個展「近くの海」(2月2日)・2月10日、浦添市美術館

いに疑問の残る内容であった。個々の作品や作家の問、示空間から感じたのはとても閉鎖的・自己充足的な空気に満ち、これは開館当初の「現代」に開かれた「問題提起型」の美術館のイメージを切り拓く活動が、今後はますます活発に行なわれたい。ON(2月1日)・2月7日、skk、丹那根恵



吉田晋世の〈Circular tower〉ほか



高洲ちひろの〈個卓〉

象化した大山梨子。「やきもの」を一種の「いきもの」に見立て、自らの感性の枠も超え多岐な自己生産的でハイブリットな「形」を生み出した松田彩花。共に、「自然一人の手」一素材とつた芸芸という営みの基本的な要素に向き合いながら、同時に「きれいみたくい」「かわい」「こわい」といった観る者の目覚めや認識の境界を刺激する極めて現代的な作品であった。

### 空間との作用を追求 「皮膚感覚」を物象化

妻谷薫 大山梨子 琉大卒展

これら、地域社会の中にしっかりと腰を据え、自らの表現の足を問い直すとともに、新たな「表現の場」を切り拓く活動が、今後はますます活発化し、さらにはジャンルや世代を超えたネットワークを創り出していくことを強く期待したい。

後半は、今行なわれた2つの「卒展」を取り上げ、少し詳しく紹介したい。「沖縄県立芸術大学卒業・修了展」(2月14日)・2月18日、沖縄県立博物館・美術館

開館10周年記念展と入れ替わるように始まった本展。表彰式や作品解説、公開講座などのイベントが開かれた初日から多くの来場者で賑わい、沖縄発のアーティスト・文化の最新動向に触れる場として定着しつつあることを感じさせた。県

文化の創造・振興の拠点となる芸術・美術館のさらなる連携強化を期待したい。展示では、特に絵画専攻に意欲が多かったように思う。中でも絵画の主題をタフローの形式に限定せず、作品と展示空間との相互作用の中に追求した妻谷薫や渡慶次ともら空間

表現一専攻の作品と、これらとは対照的にオーソドックスな日本画の形式を探りながら、その中で絵画として捉えられない爆めきと深みをもった空間への眼差しを表現した徳間あひななどが注目される。

彫刻分野では、美術館という場に依存せず、作品自体の内側に(鉄という素材に反して)軽妙な動きに富む空間を生み出すとする吉田晋世の試みの自律性が際立っていた。デザイン、工芸の各分野でも力作が並んだが、それぞれの分野で「研究」としての背景やプロセスも出てくる。ゆつたり観る作品は、腐屋の繊細な存在感に埋もれがちであったが、一方で、私たを導くこの「ソマ」に導いたの

「もわ」「ぞわ」などの擬音でしか表せない「内側からの皮膚感覚」を、「くつじむ」など「くつじむ」な自然な響きやかなかなその「余韻」のようなものなのである。(琉球大学准教授)